

# 闇の夜

服部 貞子

なか／＼止みさうもない、小言は小言を。生んで、例によつて古い落度までひき出して来る。だら／＼と思ひ切り悪く、同じことを繰りかへして居る。それがいつも自分の寛大を有難がらせる口振りだ。それが癪に障るのかも知れぬ。榮太郎は妙にちり／＼した心になつて、尻のそゝくれた藁草履の足をもぢつて居た。

「今日ちア——」  
そこへ恰度、背負ひ籠 空樽をごろ／＼させて、揚げ手拭ひの在郷女がはいつて来た。

客大切な返事を大きくして、新造が起ちあがるのを機會に、榮太郎はふらりと裏へ出た。別段何の氣もなかつた。が敷石傳ひに簷の低い醬油倉の、濕つぽい風に觸れて其前を通る時、薄暗い中からヒョッコリ顔を出した倉男が「イヨツ」と變ちきな掛け聲をして、尻を叩いて調戲つたので、例のことであるのに、今日はぐつと癪に障つた。「馬鹿にしてやがる！」と思ふと、今更う／＼して居た反感が、一時に胸に突つ張つて、榮太郎はどん／＼裏門を出てしまつた。

何處へといふ目當もないのを氣付いた時は、とある長屋の路次をぬけて、土の硬い畑の、自然に人が横切つてつけてしまつた、道でない道に出て居た。柔い風が時々思ひ出したやうに顔を撫でて行く。その長屋の前からう／＼隨いて來た小穢らしい犬が、桑株に例のものをしかけて、諦めたやうに歸つて行かうとすると、榮太郎は

ふと口笛を吹いてそれと呼んだ、腰から財布の麻袋を外して、その紐を長くして振り廻して見せる。中では二三枚の銀貨や銅貨が觸れてチヤリ／＼と鳴つた。ふと榮太郎は先刻のことを思ひ出した。

午前十時頃、伊勢屋といふ醬油屋に三十五六の目のぎよろりとした在所者風の草鞋ばきの男がはいつて來た。小賣りするのだとか言つて、五升樽に詰めさせたのを、代價は町にづれの茶屋で拂ふことにして其男は出て行つた。主人が留守の伊勢屋では、新造が自ら番號をつけて、釣錢を持たせて榮太郎に樽を擔がせてやつた。茶屋の前には一匹の馬が休んで居た。男は其馬に樽をつけてさつさとたゝせ



てしまふ、自分は爐傍に陣をとつてばかり／＼煙草を煙して居る、榮太郎はそれと向ひ合つて犬にかまつて居た。男はやがて起つて裏へ出て行つた。——男はそのまゝ歸らなかつた。その男のと思つて居た風呂敷包みも外の客が忘れて行つたのだといふことが知れた。それから一時間ばかりも過ぎてから、榮太郎は泣面をかいて伊勢屋へ歸つて來た。

桑畑やら麥畑やら、續いた畑の先は堤で、その下は線路になつて居る。榮太郎はその土手の草に寝轉んだ。青い空が際限もなく瞳に流れて、柔い、強い光りが自づと臉を射た。何處ともなく雲雀が囀つて居る。

「ふと強く吸ふた息に、風は冷たく鼻の穴を通つた。うつすらとした寒さが肌を這ふて行く。榮太郎はばかりと目を開けた。いつか空の青みは鼠の色を加へて居た。そよ／＼とした風が吹く。眠つたのだなといふ感じがかすかに起つた。猶投げ出したまゝの手首が冷えて居るのに氣が付く。と昔から永劫變らずこの耳について居たやうに思へて居た響きが、形になつて目の前を通る。汽車だ！榮太郎はひっくり起きあがつた。足がふら／＼して、額を強い布れても縛られて居るやうだ。頭腦はぼうつとして居る。そのぼつとした中へ、古い、新しい、種々の記憶が混雜になつて廻つた。

「二人化物置いてんべー」  
ばた／＼と三人の足音がして、踏切りを駆けぬける頭が見える。後れて小さなのが一人、泣き聲をたてながら後を逐ふて行く、われとわが足音に逐ひかけられて、一人後れるのは怖ろしいものだつた。と思はず四邊見廻してすた／＼道に出ようとした。忽ち歸るに歸られぬ苦しさが胸を打つ。たゞ漠とした反抗心に驅られて主家を出たので、歸らぬ積りもなかつたのだけれと今となつては歸つてからの思ひが恐ろしい、歸ら

餓餓がやゝ満たされるとふらりとまた其處を出た。最早すつかり暮れ切つて居る。ふと振りかへつて見ると、子を背負つた人の影が表に出て、顔は此方に向ひてゐるらしい。彼は恐ろしいものにも襲はれたやうにぶるつとして足早に歩き出した。また振りかへつて見る。影はまだ消えない。榮太郎は自分ながら自分が薄氣味悪くなつた。で驅けるやうに灯のある方へ急いだ。がも一度振りかへつて見て、自分を怪しむ影が消えて居るのを知ると、俄に怪しい、たよりなさ、と胸に迫つて来る。とぼ／＼した自分の影を、どうかこの漲つて居る暗の中から救ひ出したい。この小さい身體を暗に吸ひ込まれやしないか？といふやうな幽かな不安と恐怖が戰慄を呼んで、取り纏める人を求めてもするやうにあたりを見廻した。徳利をさげた髪のを、くれた女や、魚籠をさげた裸足の人などが、通りすがりざまに顔を覗き込んでゆく。それらの人足の絶え間を見計らつて、彼はやがて柔い波を打つ麥畑に身を潜めた。

頭を抱へて何事かを考へようとして居るうちに、いつか手の平を打つ顫顫の脈搏に聞き入つて暫時うつとりとなる。自づと眼が潤んで來た。臉が絞つた露が冷

たい。歸りたくない……腹は空いた。  
誰しもの常として榮太郎も堪えられぬほど父母を戀しく思つた。故郷を思へば雪の深い。軒の低い疎らな家々が目に浮ぶ。野袴はいた背の小さい父親の顔……大きな腹を抱へた母親の姿——遠く賣られて來る時にさうだつた故郷も知れないが、母親を考へ出す度にその大きな腹が目についてならぬ。小さな草鞋を履いて、三里程歩いてはじめて汽車といふものを見た。赤い帯を締めた姉も一緒だつた。姉は時々傍の男に隠れるやうにして泣いて居た。榮太郎はたゞ窓から窓に入る山や川を眺めて呆氣にとられて居た。其姉は四里程離れた隣り町に住んで居るといふことを聞いたそれも、懐かしい。——が併しどうも夥しく腹が空いて居る。  
榮太郎はのそ／＼歩いて道に出た。踏切りの番人が家では、子供を背負つた女房が、今都を下さうとして、のつそり土手から下りて來た榮太郎を透して見た。小さな洋燈のかげに、棚の燵や草鞋やらが見えて、畫間の賣残り金鏝が、三つ四つ硝子の蓋を曇らせて居るのを見ると、榮太郎はいきなり飛び込んで二錢銅貨を投げ出した。かつ／＼した手許を、女は怪んで見て居たが、言はうとして別段何にも言はなかつた。

「死んでくれる！」  
ふと、心の底で叫んだが、聲ない聲が耳に囁いだか、  
「死んでくれる！」  
二度まで其言が頭腦に閃めくと習慣の恐怖に累されて堪らなく戰慄して。

「死ね、死ね！」  
續けてさう思つて見ると、もう泣く必要もないやうな氣がする。かすれ／＼な十五年の記憶は、彼にとつてさほど未練の残る程のものではなかつた。靜かに顔をあげて見ると、瞬く星がきらりと。蟬つた胸を散らし

て、自分にも譯がわからぬ程氣が晴々とした。  
自分が死んだ後の人々の驚愕を思ふと、目的のない復讐心が勇みたつ——どうしても死ななければならぬやうな氣持になつた。けれども底には、もの哀れな、濕つぽい情緒が重く流れた。

風が行く、そよ／＼と風が行く。空虚になつた頭に

地を揺る遠い響きが電光のやうに傳はつた。彈かれたやうに起ちあがらうとしたが、關節の力が一度に抜け、肌をにぞつと粟が生つ。再び腰を起してたわつく足を踏みしめて土手を駆け下りた。人が見て居ようが見て居まいが、あたりのものは最早目に入らぬ。頭腦は死の用意にのみ働いた。冷たい鐵道に頭を乗せて、手早く刺子の肩當てをとつて顔に蔽つた。もの凄いい軌りが後頭部に烈しく響く。

番人の女房は泣く兒を賺しながら、汚れた旗を持つて柵のところに出て來た。鐵鎖をひかうとしてふと線路を見遣つてぎよつとした。黒い影が横はつて居る。猶能く透して見ると人だ、慥に人だ。思ひ當つたやう

## 敗者

私が結婚してから長い様な気がするが漸く半年。それで最早今日の様な言論をした。否、今日ばかりではない、殆ど毎日の様に物争ひはして居る。もとより下々の者の手前もかね、名譽と云ふ事を人一倍に考へる私と

一昧私は空意張りをしたい性分で、人に負る事の大嫌いな、理が非でも勝ちさへすれば其れて氣が済む。若し負けてもすると其人が恨めしく、呪はしく、仕うかして復讐がし度い。だから姉であらうが、父や母、乃至良人の様な目上の者に對しても仕うしても負け度くない。其くせ心は小さく、事に向つても立派な態度が取れぬ。稍もすると臆病な、其の又臆病を氣がつくと人に笑はれはすまいかと矢張り氣になつて煩悶する。左様した風で私は小學から、女學校を経て來た。友人に對して抱いた心は皆偽つた情——飾つた言葉、學問も勉強も皆友と云ふ者に刺戟されて來た。決して自分の修養の爲めには無い。唯人他に負けるのが口惜しい!と云ふに止まらぬ。

今の良人を自分から撰んだのも人に笑はれぬ、財産も名譽もある立派な辯護士、それであつた。級中で私は一番富み、一番器量が良いとの評判であつた故、猶ほの事高い處を望んだ。自分を戀した人も二三人はある、父が私の候補者に立てた者も三四人もあつたが、私は戀する人を捨て、候補者の中での一番、財産と名譽のある辯護士を撰んだ。

私の理想としたのは何であらう。私の理想は虛榮心

に胸は早鐘をつく。我にもあらず躍り込んで、「何だ何だ!この馬鹿野郎!」

榮太郎はふつと飛びあがつて。失敗つたとばかり一目散に駆け出す、猶豫も與へず後追ふ女房の髪づらかすめて列車は目まぐるしく駆けた。絶えぬの息つく間もあらず、これに後れてはとばかり、満身の力を籠めて榮太郎は身を躍らした。呀と思ふ間に黒い塊はぱつと弾かれて四五間先の闇に倒と落ちた。

取り殘された女房は、暫く行手の闇を睨めて立つて居たがどこまでも、事なく汽車が進むので、安心と、不安との胸を抱いて、逃げるやうに小屋に駆け込んだ。

## 加藤 菊子

てさう目立つた争動はせぬ變り随分と酷い振舞もする、自分では餘りあるまじき事と思ひついても一時左様思ふばかりで、又事に當つて直ぐ腹が立つ、立てまいと思つても腹の立つのが私の性分だ。

の權化である。立派な西洋館、華々しい服裝、舞踏服に肌を包むだ孔雀の誇らしい自分の姿を某名家の夜會場に夢見た。理想と云つても、良人の柔しい。愛ては無い。友の口にする。ス井トホームでもないス井トホームなんて云ふ言葉は私には最も癪に觸つた。自分には生れるから死ぬ迄女王の様な生活をするのだ、私は幼い時クレオパトラを呼びて其埃及土の絶世の妖姬に憧憬した事もある。

あゝ私は斯うした屋敷を畫いて嫁して來た。もとより失望に終つた、束縛、習慣、壓制、總て強いものが私の頭を壓えて私を自由にせぬ。良人は權威を以て私に迫つて來る。自分では虚偽を嘲つた道徳を以て女と云ふ名をあげせかけて私の此の身軀中を縛つて終ふ廿世紀の女子とは斯うしたものと思つて來た私の説をひちやひちやに破つてはてはふいと出て終ふ。私は口惜しくつて仕方がない、佛國の華々しい交際場裡を想像してそれを實現しやうと思つた其れを實は楽しく、空裡に泣く身となつた。

良人は多情の身である。何のかのとて幾夜かをあける。私は此頃つくづくと良人の愛と云ふ事も考へ、ス井トホームとはどんなもの?ス井トホームを造る